

# アントレプレナーシップの概念の方法学 —多様性と価値をめぐる方法論的探究—

山口大学経済学部准教授

平野 哲也

## 要 旨

近年、アントレプレナーシップ研究においては、ヨーロッパ学派やコンテクスチャライゼーションなど、実証科学では定式化困難とされる多様性へアプローチする方法に注目が集まっている。しかしながら、現状としては一部の研究論文と問題提起にとどまっており、アントレプレナーシップの豊かな多様性を捉えるためのブレイクスルーが求められている。より具体的には、ヨーロッパ学派が問題提起する「認識論のレベル」と個々の研究が方法として採用するコンテクスチャライゼーションが目指す「方法のレベル」をつなぎ、アンチテーゼや個別研究でのメソッドとして終わらせない、より体系性を有する「方法論のレベル」に関する実践的考察が求められている。

そこで、本稿では世界と日本のアントレプレナーシップ研究の概況、メタ理論、価値と概念に関する理論的検討、アントレプレナーシップの多様性に関するシステムティック・レビューをてがかりに、アントレプレナーシップの多様性を包括的に捉える知識産出の基盤としての方法論的基礎に関する考察を行う。

## 1 はじめに

アントレプレナーシップ<sup>1</sup>研究はときにアントレプレナーシップ・サファリ (Rocha and Birkinshaw, 2007) やジャングル (Audretsch, Kuratko, and Link, 2015) と形容される。理論のレベルでは、経済学、心理学、社会学など多様なディシプリンと理論のもと学際的に研究が行われる (Herron, Sapienza, and Smith-Cook, 1991)<sup>2</sup>。対象のレベルでは、シュンペーターやカーズナーが生み出した古典的なアントレプレナーシップ像のみならず、社会、文化、ジェンダー、マイノリティ、障害者の起業に関するヒト、特性、行動、機能、行為、ニュービジネス、オーナーシップを分析レベルとする多層的な研究が行われる<sup>3</sup>。

歴史的に学問としての厳密性や概念的境界が疑問視されてきたアントレプレナーシップ研究だが、1980年代の急成長から現在にかけての対象 (Hornsby, *et al.*, 2018) と多層性 (Shepherd, 2011) の拡大、マネジメント・ジャーナルにおける研究論文の増加など (Ireland, Reutzell, and Webb, 2005)、量・インパクトの両面で着実にそのプレゼンスを高めている (Busenitz, *et al.*, 2014)。また、戦略経営論 (strategic management) と融合した新しいジャーナルの創刊 (Ireland, 2007) や近接するファミリービジネス研究との接点など (Rogoff and Heck, 2003)、学問としての制度化も著しい。

一方で、本稿の問いであるアントレプレナーシップの「多様性」をいかに捉えるか。その方法は体系化されてきたのか。おそらく、知識の脱構

築を目指すポストモダンの視点から (Hatch and Cunliffe, 2013)、単にアントレプレナーシップ像として十分に体系化されてこなかったジェンダーやマイノリティに目を向けるだけでは不十分である。また、アントレプレナーシップの多様性は対象のレベルで異質多元性 (heterogeneity) という表現がなされることが多いが、対象のレベルで日々新しく生まれる現象の動向や流行を追い続けねばよいわけでもない。

近年、アントレプレナーシップ研究においては、ヨーロッパ学派 (European school of entrepreneurship) やコンテクスチャライゼーション (contextualization)<sup>4</sup> など実証科学では定式化困難とされる「多様性 (entrepreneurial diversity)」へアプローチする方法に注目が集まっている<sup>5</sup>ものの、現状としては一部の研究論文と問題提起にとどまっている。

アントレプレナーシップ研究はプレ・パラダイグマティック、つまり独自の学問的境界を構築した段階にはないと評されることが多い (Aldrich and Baker, 1997)。その哲学的・理論的基礎を構築し (Karatas-Ozkan, *et al.*, 2014)、方法論的多元性を維持しつつ (Leitch, Hill, and Harrison, 2010)、現象の複雑性やダイナミズムへ接近し (Busenitz, *et al.*, 2003)、知識の累積的な断片化 (accumulative fragmentalism) ではなく (Harrison and Leitch, 1996)、包括的に統合する必要性 (van Burg and Romme, 2014) は共有されつつあるものの、その基底となる方法論的多様性は十分とはいえない (Wiklund, *et al.*, 2011)。また、アントレプレナーシップ研究においても、より研究分野を俯瞰し、特定の現象に関する複数の研究結果を単一の研究結果として統合するメタアナリシスの方

<sup>1</sup> 起業家精神、企業家精神などと訳される。

<sup>2</sup> 例えば、経済学はBaumol (1968)、心理学はGorgievski and Stephan (2016)、社会学はWatson (2012) など。

<sup>3</sup> 例えば、社会はSaebi, Foss, and Linder (2019)、文化はLounsbury and Glynn (2001)、ジェンダーはHenry, Foss, and Ahl (2016)、マイノリティはBates, Bradford, and Seamans (2018)、障害者はRenko, Harris, and Caldwell (2016) など。

<sup>4</sup> 詳しくは後述 (第3節 (4))。

<sup>5</sup> 例えば、Gartner (1990)、Welter, *et al.* (2017)。

法は確実に進展しつつあるが (Schwens, *et al.*, 2018)、その方法自体は多様性を包括的に捉えるものとはなっておらず、学術環境の制度化の影響も受け、結果として本稿が検討するアントレプレナーシップの「多様な価値の豊かさ」を見失ってしまう。Gartner (2001) が「エレファント・テーゼ」で強調したように<sup>6</sup>、アントレプレナーシップの学際性の「森」のなかで、その多様性を捉える「調和のとれた全体 (congruous whole)」はいまだ構築されていない。

現代の社会科学は実証研究の国際標準化時代 (入山, 2015; 浅川, 2019) といわれ、国際ジャーナルを含む実証科学の制度化 (清水, 2016) が進行する。アントレプレナーシップ研究もその多くが量的研究を中心とする実証研究である (Hindle, 2004; Hlady-Rispal and Jouison-Laffitte, 2014)。実証研究の潮流のなか、その批判を越えて、いかにアントレプレナーシップの多様性を捉える方法を構築するか。エレファント・テーゼに迫るにはどのようなブレイクスルーが必要なのか。

本稿では、世界と日本のアントレプレナーシップ研究の概況、メタ理論、価値と概念に関する理論的検討、アントレプレナーシップの多様性に関するシステマティック・レビューをてがかりに、アントレプレナーシップの多様性を包括的に捉える知識産出の基盤としての「方法論的基礎」に関する考察を行う。前述のエレファント・テーゼや古くはロラン・パルトが提唱した学際性の「本質」 (Clifford and Marcus (Eds.), 1986) を踏まえながら、特に国際的な研究コミュニティがおそらく相対的に見失いがちな「価値」に注目し、ヨーロッパ学派やコンテクスチャライゼーションが目指す「その先」の方法論の体系化に関する探究を行う。

## 2 アントレプレナーシップ研究の トピックの潮流と方法の地図

### (1) アントレプレナーシップ研究の

#### トピックの潮流

アントレプレナーシップは語る者によって、その姿が大きく異なる。起業家が自分の経験からその理想と現実を語るか、政策担当者が政策対象としてその期待と社会的インパクトを語るか、一般が関心と無関心の間でテレビに映るスティーブ・ジョブズ氏やマーク・ザッカーバーグ氏を語るか。アントレプレナーシップ研究の多くは、歴史的にアントレプレナーを革新的な英雄として概念化してきた。「新結合」や「創造的破壊」を行う存在として概念化したシュンペーターと「機敏な革新者」として概念化したカーズナーなどの古典にあるアントレプレナー像 (山田, 2017) は、現代でもアントレプレナーがイノベーションと雇用を創出する役割を有し (忽那, 2013)、産業の新陳代謝、顧客価値の創造、社会的課題の解決という社会的意義をもつ存在 (江島, 2017) であることともに広く認識されている。

アントレプレナーシップ研究は、伝統的に機会と個人 (Venkataraman, 1997; Shane and Venkataraman, 2000)、近年のレビューでは機会、個人とチーム、組織化のモード、環境の四つの概念領域から構成されてきた (Busenitz, *et al.*, 2003; Busenitz, *et al.*, 2014)。機会はブリコラージュ (Baker and Nelson, 2005) やエフェクチュエーション (Sarasvathy, 2008)、個人はリーダー (powerful leaders) (Gutermann, *et al.*, 2017) やその特性と

<sup>6</sup> Gartnerは「物事や人物の一部、ないしは一面だけを理解して、すべて理解したと錯覚してしまうこと」を伝える「群盲象を評す (Blind Men and Elephant)」というインド発祥の寓話をひきながら、アントレプレナーシップ研究における理論と方法論に関する問題提起を行っている (Gartner, 2001)。理論的明快さ (theoretical clarity) や学際性におけるディシプリンの課題を検討したうえで、アントレプレナーシップの「個」の研究に対する「全体」としての「多様性 (diversity) を説明する理論」はないこと、「調和のとれた全体 (congruous whole)」を構成していないことを指摘した。本稿では、暫定的に「エレファント・テーゼ (命題)」とする。

してのEntrepreneurial Orientation (EO) (Covin and Slevin, 1989)、創造性 (Tang, Kacmar, and Busenitz, 2012)、情熱 (Cardon, *et al.*, 2009)、組織化のモードはベンチャーやガゼル、ユニコーン (Aldrich and Ruef, 2018)、環境はエコシステム (Spigel, 2017) などが挙げられる<sup>7, 8</sup>。

例えば、アマゾンのジェフ・ベゾス氏やデルのマイケル・デル氏などがもつ①クエスチョニング、②オブザービング、③エクスペリメンティング、④アイデア・ネットワークといった革新的起業家の思考パターンに関する研究 (Dyer, Gregersen, and Christensen, 2008) や、グラミン銀行を創設したムハマド・ユヌス氏やバングラデシュで株マザーハウスを創業した山口絵理子氏などの存在を通して現在注目を集めるソーシャル・アントレプレナー (社会的起業家) の社会的役割や個人特性に関する実証研究など (Zahra and Wright, 2016; Ruskin, Seymour, and Webster, 2016)、優れた起業家のベスト・プラクティスをめぐる研究は数多く存在する。

一方で、アントレプレナーシップ研究は革新的な英雄としての起業家個人の特性やその好ましい環境などポジティブな側面のみならず、実践のなかで生まれる多様な姿を捉えようとしている。ポストモダンとしての批判から広く実証研究を含みながら、その「本質」に迫るジェンダー (Henry, Foss, and Ahl, 2016) やアメリカにおける黒人や移民など、これまで起業家としてメインストリームで語られてこなかったマイノリティ (Bates, Bradford, and Seamans, 2018) はその代表である。近年では、負け犬のアントレプレナー (underdog entrepreneurs) と題し、生計確立型、移民、ADHD (注意欠如・

多動症) / ディスレクシア<sup>9</sup>、身体障害、傷痍軍人とPTSD (心的外傷後ストレス障害) などを類型化するチャレンジベースド・アントレプレナーシップ (Miller and Le Breton-Miller, 2017) や資本主義におけるアントレプレナーシップの脱構築 (Williams and Nadin, 2013)、起業プロセスにおける従業員の役割 (Braun, *et al.*, 2018) を考察するポスト・ヒロイック・ビューも登場した。アントレプレナーシップは「複雑で、ダイナミックな発生のプロセスであり、アクターとプロセス、コンテキストの相互作用によって特徴づけられる現象」 (Karatas-Ozkan, *et al.*, 2014) である。

## (2) アントレプレナーシップ研究の方法の地図

ここでは世界と日本のアントレプレナーシップ研究の概況をみていきたい。アントレプレナーシップという概念の起源は18世紀のリチャード・カンティロン言葉にはじまり、ドイツ、シカゴ、オーストリアへ知的伝統が引き継がれていったとされる (Hébert and Link, 1989)。その後、アントレプレナーシップ研究のリサーチ・コミュニティに関する関心は低く、休眠状態の時期もあったとされるが (Audretsch, 2012)、1980年代以降に分野として大きく進化をとげることとなる。

1980年代以降のアントレプレナーシップ研究は①一つの先駆的分野としての離陸、②成長、③成熟の模索の段階に入り (Landström, Harirchi, and Åström, 2012)、現在に至って独立した研究領域としての評価 (Ireland, Reutzler, and Webb, 2005) や方法的厳密性 (Short, *et al.*, 2010) を探究する段階に達した。また、学術・方法論レベルの発展のほか、米国経営学会におけるアン

<sup>7</sup> ブリコラージュは「新しい課題や機会に対して、手元 (at hand) の資源を組み合わせ、やりくりすること (making do)」と定義される (Baker and Nelson, 2005)。

<sup>8</sup> エフェクチュエーションは①手段主導 (「手中の鳥」)、②損失の許容可能性 (「許容可能な損失」)、③パートナーシップ (「クレイジーキルト」)、④偶然 (「レモネード」)、⑤コントロール (「飛行機のパイロット」) の起業家的熟達原則に基づくプロセスである (Sarasvathy, 2008)。ブリコラージュ、エフェクチュエーションのいずれも、機会を「発見する」ものではなく、「つむぎ出す」「創造する」と考える方法である。

<sup>9</sup> 文字の読み書きに限定した困難さをもつ疾患。知的障害ではなく、脳機能の発達に問題があるとされる。

トレプレナーシップ部門の設立、マネジメント・ジャーナルにおける研究論文の増加 (Busenitz, *et al.*, 2014)、アントレプレナーシップ研究関連主要国際ジャーナルの充実など、学際性を育む学術環境の制度化も着実に進展した。

では、日本のアントレプレナーシップ研究はどのような状況か。日本のアントレプレナーシップ研究の書誌情報分析を行った山田・植田・柳 (2015) によると、学術翻訳語として普及したアントレプレナーシップは受容された19世紀以降、学術的に「起業家」や「企業家」、「アントレプレナー」などの複数の翻訳語を研究者が時代の流れに影響を受けて選択しているといった課題と、学界以外のビジネス界一般における翻訳語の使用が研究者の訳語選択に影響を与えているといった仮説が提示されている。翻訳語の使用に関する厳密性への疑問と理論構築の未熟さが指摘され、「社会現象としてのentrepreneurshipを厳密に学術的な枠組みで捉え、我が国の事情を踏まえながら理論的に体系化を目指す努力は十分とはいえない」状況と評されている。

グローバルとローカルの研究コミュニティの境界や固有性などさらなる検討が必要であるが、山田らの指摘にあるように、日本のアントレプレナーシップ研究はいまだ、世界のアントレプレナーシップ研究がもつ実証科学やヨーロッパ学派の伝統のような体系性と制度化を伴う「日本発の歴史やコンテキストに基づく理論と方法」を確立しているとはいえないだろう。日本人研究者がかかわる研究論文は、アントレプレナーシップ研究関連の主要な国際ジャーナルに数多く発表されているが、日本の固有性を方法として発信する研究

は少なく、多くが日本への輸入と翻訳に重点が置かれているものと推測される。

ただし、世界のアントレプレナーシップ研究においても、ほかの応用科学分野と比較した際の方法的課題は多数指摘され<sup>10</sup>、本稿でも実証科学・ヨーロッパ学派ともにいくつかの方法的限界は指摘しうる。アントレプレナーシップ研究の対象や方法の特徴として、中小企業研究とのつながりの深さを指摘することができるが<sup>11</sup>、日本における中小企業研究は戦前の1930年代から続く知的格闘の歴史をもち、主にフィールドワークを通じた実態把握から研究コミュニティを形成してきた。その方法はおそらく一定の妥当性をもち、世界にも方法として発信しうる可能性を秘めている。

さらに、日本のような研究コミュニティのローカリティ（地域性、局所性）を考える場合、その学術的発信のみならず、経営や政策を視野に入れた実践的受信や受容も重要となる。社会的信頼性と手続き的客観性によって数値が優位性をもつ世界にあって (Porter, 1995)、「日本発の理論と方法」を発信するためには、いかに日本の方法論をメタ的・理論的に世界に位置づけたうえで発信するか、いかに世界で流通する知識をその方法の限界を理解したうえで受信・受容するかが問われている。

### 3 アントレプレナーシップ研究の

#### メタ理論

#### (1) 社会科学のパラダイム

アントレプレナーシップの多様性を探究するに当たって、その基礎となる社会科学のパラダイム

<sup>10</sup> Shortらはアントレプレナーシップ研究に向けられる他分野の懐疑の目を受け、Organizational Research Methodsの編集委員会に対して他分野と比較した際の方法論について質問を行っているが、“poorly”や“very poorly”といった辛辣な反応を受けたことについて言及している (Short, *et al.*, 2010)。

<sup>11</sup> スモールビジネス研究とアントレプレナーシップ研究の学問的境界はときにオーバーラップし、曖昧になる傾向にある (Grant and Perren, 2002)。日本における二つの研究のつながりは、1970年代以降の何度かのベンチャー・ブームを受けた「小さな組織の一形態」としてのベンチャーへの注目、近年では多様な起業の流行を受けた「小さな組織の創造者」としてのアントレプレナーシップへの注目など、両者はともに関係し合って発展してきたと考えられる。

についてみていきたい。社会科学は存在論、認識論、人間論、方法論の四つの諸仮定から説明される (Burrell and Morgan, 1979; 坂下, 2014)。パラダイムはそういった「特定の存在論、認識論、方法論を示す包括的な哲学体系であり、その利用者を特定の世界観に結びつける信念体系」(Denzin and Lincoln (eds.), 2000) である。あらゆる組織理論は、「何らかの科学哲学ならびに社会の理論に依拠している」(Burrell and Morgan, 1979) ことを示す。

特に、研究対象となる社会的世界をどうみるかにかかわる認識論の次元は、実証主義と反実証主義の二つの立場から構成される。実証主義は客観性、因果関係の実証、一般性といった特徴を有し、反実証主義は主観性、複雑性の記述、特殊性といった特徴を有する (Easterby-Smith, Thorpe, and Lowe, 2002)。例えば、反実証主義に位置づけられる解釈主義は、人間の行為や活動の基本としての生きた経験を強調する現象学をベースとして (Sandberg, 2005)、社会的世界の複雑性やダイナミックな特質を受け入れ、全体的な視点をもって参加者に接近し、参加者のリアリティやものの見方を解釈する認識論的立場である (Leitch, Hill, and Harrison, 2010)。

現在、マネジメントや戦略経営論といった応用科学の分野では、実証主義を認識論とする量的研究が圧倒的多数を占めているものの (Easterby-Smith, Thorpe, and Lowe, 2002; Gibbert, Ruigrok, and Wicki, 2008)、最近では質的研究の方法的洗練、代替的方法からパイオニア的方法としての見直し、国際ジャーナルにおける特集号や論文数の増加などもあり、反実証主義の認識論も転換点に向かっている (Bluhm, *et al.*, 2011)。

2010年代以降の特に重要なパラダイムに関する

トピックとして、再帰性を挙げるができる。再帰性とは「研究者が(起業家などの)実践に参与する機会」を意味する。Cunliffe (2011) は Morgan and Smircich (1980) の主観-客観の連続体を再検討し、パラダイムは客観主義、主観主義、間主観主義の三つのクラウドから把握されるとする。客観主義は具象的で研究者は独立した観察者とみる機能主義の認識論、主観主義は参加者のストーリー(実践と体系)や参加者の視点を捉えるシンボリック<sup>12</sup>、エスノグラフィ<sup>13</sup>、ドラマツルギー<sup>14</sup>の認識論、間主観主義は再帰性、つまり研究者と研究対象の関係も含み、他者や環境を解釈・理解し、いかに関係づけるかといった点を強調する認識論である。また、Hassard and Cox (2013) は Burrell and Morgan (1979) の二つのパラダイムを更新し、再帰性のパラダイムを「第3の道 (third-order)」として位置づけている。

アントレプレナーシップ研究は、その前提として起業家やその創造したベンチャーなどを扱う現象ベースの研究領域である (Wiklund, *et al.*, 2011)。近年、アントレプレナーシップ研究においても、リガーとレリバンス(科学的厳密性と実務的有用性)の対立を越えて、実践家とのコミュニケーションのモデルも設計しながら、実践家オリエントのパブリケーションを求める研究もある。アントレプレナーシップ研究におけるレリバンスを求めるには、研究者はオンライン・フォーラムやプレゼンテーションなどのメディア・リッチネスを意識しながら、起業家や政策担当者との研究の重要性や社会的インパクトを共有する親しい関係を構築することが求められている (Wiklund, Wright, and Zahra, 2019)。

「よい実践ほど理論的なものはない」(Ployhart and Bartunek, 2019) という言葉もある。現代の

<sup>12</sup> 人間間の相互作用を、行為者の観点から捉えようとする手法。

<sup>13</sup> コミュニティに加わることで、観察やインタビューといった質的な調査を行う手法。

<sup>14</sup> シンボリック相互作用論から生じたもの。日常生活における社会的相互作用を観察する手法。

社会科学、特にアントレプレナーシップ研究のような学際研究はそれぞれの認識論の理解と方法の共有なしに知識創造や理論構築は成立しない。それらが成立したうえで、「アントレプレナーはいかにすべきか?」「アントレプレナーの実践をいかに改善できるか?」といった起業家の実践やその多様性を射程とした問いに学術的解を検討していく必要がある。

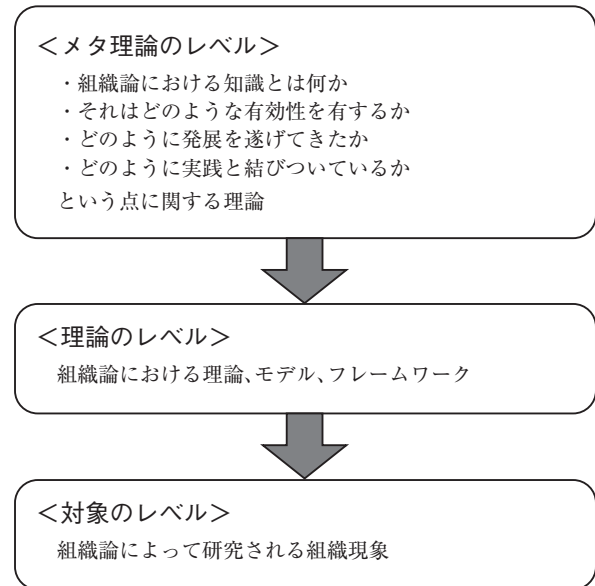
## (2) 学際研究のメタ理論

社会科学における知識創造 (Boxenbaum and Rouleau, 2011) や理論構築 (Shepherd and Suddaby, 2017) は社会科学のパラダイムに依拠しながら、それが学術的に「興味深い」(Davis, 1971) ものであれ、現象ベース (von Krogh, Rossi-Lamastra, and Haefliger, 2012) のものであれ、理論と現象の間で行われる。ここでは、その概念構築を行う基礎となる学際研究の定義とメタ理論の方法や意義についてみていきたい。

学際研究は、「疑問に答え、課題を解決し、単一の専門分野で適切に扱うには広範すぎるもしくは複雑すぎるテーマを扱うプロセスである。より包括的な理解の構築のために知見を統合するという目標をもち、学際研究は専門分野を利用する」と定義される (Repko, 2012)。学際研究の意義と魅力は、単に専門分野を寄せ集めた多専門性に陥ることなく、その方法自体を体系化し、最終的に課題解決へ向けて知識を統合することにある。

そして、学際研究における知識創造や理論構築を行ううえで、パラダイムや視点の分裂、断絶を回避する方法の一つがメタ理論的内省のプロセスである (Tsoukas and Knudsen (Eds.), 2003)。メタ理論は、図-1にあるように、特定の理論やモデル、フレームワークを扱うのではなく、一つの知識を領域全体のなかで俯瞰・相対化し、その知識自体がもつ意味や発展プロセス、実践とのつながりを考察する「理論の理論」を意味する。例

図-1 メタ理論的内省のプロセス



資料：Tsoukas and Knudsen (Eds.) (2003) より筆者作成

えば、組織論におけるメタ理論の重要性は、「組織とは何かを理解する」ための「語り方の多様性」につながる点にある (竹中、2013)。

理論は「概念の集合であり、そこで提示された概念の関係性によって関心現象が説明され、理解され、認識されるもの」(Hatch and Cunliffe, 2013) と定義される。研究者はその理論をつくるために、対象が存在する社会的世界に対して、すでにみた認識論と方法論に基づいて対象にアプローチする。実証研究であれば、理論のもととなる仮説と命題をたて、測定尺度を用いて対象の測定を行い、質的研究であれば、体験とコンテクストを重視し、対象との対話や相互作用を通してその意味解釈を行う。

ここで注意が必要となるのは、実証研究や質的研究の区別なく、メタ理論的内省がなされないと、ディシプリンや理論の断片性のみならず、知識の統合がなされない可能性があることである。学際研究では特定の共通となる理論的基盤のなさとお対象の異質多元性ゆえに、対象が研究者それぞれのディシプリンや理論によってばらばらに探究さ

れ、統合や政策的合意形成がなされず、最終的に現象の動向や流行のみに注目する近視眼の罫に陥ってしまう危険性がある。

例えば、アントレプレナーシップ研究と近接する中小企業研究においては、メタ理論的内省が相対的に不足していたことから、ローカルな研究コミュニティである日本では歴史的に二重構造論を中心とする規範的問いが偏在し、国際ジャーナルに代表される国際的な研究コミュニティでは実証研究をベースとする実証的問いが遍在する状況になっていることが指摘できる(平野、2018)。その多くは交わることなく、メタ理論的内省を通して知識を統合する方法論はいまだ構築されていない(河村、2018)。中小企業研究においては、それらを解決し、現在進行形の中小企業の価値評価に踏み込むため、実証科学の多彩なアプローチのなかで対象を精緻に描く方法(=木をみる)と、現実の価値を評価・デザインする方法(=森をみる)の融合が求められている(平野、2019)。学際研究は個と全体のバランスとそのデザインが求められる。

個と全体のバランスとデザインに関しては、冒頭にみたエレファント・テーゼや、古くはロラン・バルトの言葉にみることができる。ロラン・バルトは学際性の本質について、「学際的に事をなすには一つの「問題」(テーマ)を選び、そのまわりに二、三の諸科学を集めるだけでは不十分である。学際性とは、どの学問分野にも属さない新しい「対象」を生み出すところ」(Clifford and Marcus (Eds.), 1986)にこそ意味があるとした。

アントレプレナーシップはその異質多元性としての多様な姿が本質であり、その多面性を包括的に捉えることにアントレプレナーシップ研究の学際性の魅力がある。アントレプレナーシップの多様性を探究するためには、学際研究として一つの専門分野がもつ限定合理性を理解した知識の統合

が必要である。一つのディシプリンや理論が生み出しうる可能性と限界を理解しなければ、その知識の統合を行うことはできない。メタ理論的内省はその学問分野で生まれた知識の過去と現在を相対化し、未来の統合につなげる一つの参照点となりうる。

### (3)アントレプレナーシップ研究の

#### メタ理論の構図

では、アントレプレナーシップ研究におけるメタ理論的内省はこれまでどのようなようになってきたのか。先ほどの組織論のメタ理論的内省(Tsoukas and Knudsen (Eds.), 2003)をフレームワークとしてアントレプレナーシップの既存研究のマッピングを行い、その現況をみていきたい。なお、本稿では暫定的に、理論のレベルにディシプリンを含め、理論と対象の間を方法論のレベルとし、「メタ理論のレベル→理論のレベル(ディシプリンを含む)→方法論のレベル→対象のレベル」とする。

まず、対象のレベルである。すでにみたように、アントレプレナーのリーダーやその特性、ベンチャーやガゼル、ユニコーン、エコシステムのみならず、社会、文化、ジェンダー、マイノリティ、障害者の起業など多彩なトピックを対象として、そのヒト、特性、行動、機能、行為、ニュービジネス、オーナーシップを分析レベルとする多層的な研究が行われる。

次に、方法論のレベルである。方法論は量的研究(Dean, Shook, and Payne, 2007)と質的研究(Chetty, *et al.*, 2014)の両方のアプローチが体系的に解説されているが、方法論的多様性が不足しているとの見方が強い(Wiklund, *et al.*, 2011; Karatas-Ozkan, *et al.*, 2014)。最新の質的研究の動向については、Hlady-Rispal and Jouison-Laffitte (2014)によると、2007年から2012年までのJournal of Business Venturing、Entrepreneurship Theory



and Practice, Entrepreneurship and Regional Developmentの3ジャーナルから111の質的研究の論文が特定され、全体に占める割合が2007年の9.2%から2012年の18.7%まで増加したとしている。現状として大半の質的研究が暗黙的に伝統的な科学研究(実証主義)に依拠しているが、近年では存在論的、認識論的多様性(解釈主義や批判理論)もみられる段階であるとしている。解釈主義の認識論に限っていえば、2000年代の実証主義に対する「代替的なアプローチ」との認識(Jennings, Perren, and Carter, 2005)から、2010年代になり依然として論文数は少ないながらもポスト実証主義のアプローチとして重要性が認識されるに至っている(平野, 2015)。

そして、理論のレベルである。ディシプリンは古くは経済学の意味決定理論、社会システム理論、心理学・行動科学が領域を構成してきた(Ripsas, 1998)。最新の研究では、経済学、経営学、社会学、心理学、経済・文化人類学、経営史、戦略、マーケティング、ファイナンス、地理学まで多様化している(Carlsson, *et al.*, 2013)。また、フレームワークは次の二つの研究を検討したい。第1に、マクロ・ミクロの学派、起業家のプロセス、起業家の行動と意思決定、ベンチャーの類型と成長率、ステージとリスクの六つをベースとした「フレームワークのフレームワーク」(Kuratko, Morris and Schindehutte, 2015)である。第2に、①組織のステータス(ヒト、企業、チーム)、②行動(モチベーション、個人、組織)、③パフォーマンス(成長、イノベーション、ソーシャル)をベースとした折衷的パラダイム(Audretsch, Kuratko, and Link, 2015)である。いずれも、実証主義的視点からアントレプレナーシップのダイナミクスを一つのフレームワークで統合する方法を提供する。

最後に、メタ理論のレベルである。2000年代以降のレビューの結果、中小企業・アントレプレナーシップ研究は、Burrell and Morgan (1979)

のパラダイムにおける機能主義の方向性を示し、実証科学がアプローチとして優勢である(Wiklund, *et al.*, 2011; Karatas-Ozkan, *et al.*, 2014)。また、アントレプレナーシップ研究の領域全体の到達点については「プレ・パラダイグマティック」の段階にあり(Grant and Perren, 2002; Watkins-Mathys and Lowe, 2005)、特定の理論体系をもたないために、「ごちゃ混ぜ」(Shane and Venkataraman, 2000)で「脆弱な」(Davidsson, Low, and Wright, 2001)学問体系と評されている。

#### (4) ヨーロッパ学派の視点と課題

実証科学の優勢に対して、近年ではそのアンチテーゼとしてヨーロッパ学派の認識論やコンテクスチャライゼーションといった方法が生み出されてきた(平野, 2015)。本稿の問題意識とつながるエレファント・テーゼを指摘したGartnerは、ヨーロッパ学派の特徴として次の3点を指摘する。第1に主流となる実証科学とは異なり、例えば機会のアプローチに関する源流や本質までさかのぼるなど、脱線してもそのアイデアの歴史(思想史)の包括的な探究を行うこと、第2に哲学や人文科学などのアントレプレナーシップ研究の領域外の視点を積極的に取り入れ、学界の根底にある存在論・認識論を考察すること、第3にジェンダーなどあまり口に出されず、しばしば当たり前のものとして認識されてしまい、議論されない「その他」のトピックを取り上げ、その価値と仮定に注目することといった特徴である(Gartner, 2013)。

また、より方法的視点として展開されるコンテクスチャライゼーションは、組織行動論におけるコンテクスト(Mowday and Sutton, 1993; Johns, 2006)などの視点を吸収しながら、時間的、空間的、社会的、制度的側面の多様な側面からアントレプレナーの行動や現象を定義する方法である(Ucbasaran, Westhead, and Wright, 2001;

Welter, 2011; Zahra and Wright, 2011; Zahra, Wight, and Abdelgawad, 2014)。最新の研究では、アントレプレナーの「なぜ」「何」「いかに」の問い(第1の波)から、コンテキストの主観的な要素や構築、制定の問い(第2の波)を越えて、アントレプレナーシップ研究の領域を広げる理論化(第3の波)が求められている(Welter, Baker, and Wirsching, 2019)。

“Everyday Entrepreneurship-A Call for Entrepreneurship Research to Embrace Entrepreneurial Diversity”と題した論説を発表したWelter, *et al.* (2017) は、アントレプレナーシップ研究の対象と方法を取り巻く現況について、ガゼルやユニコーンを頂点とするシリコンバレーモデルが研究を構成し、アントレプレナーシップ研究者が対象の多様性をみなくなっていること、機能主義をベースとした研究では経済的ゴール以外の豊かなモチベーションを捉えられないことなどを指摘し、アントレプレナーシップの多様性を捉えることの必要性を指摘する。

ヨーロッパ学派とコンテクスチャライゼーションの基底には、経済学など実証研究をベースとする研究のみではアントレプレナーの行動様式を考察するうえで重要なコンテキストから実態が切り離され、決定的なインサイトを見逃してしまうことに対する問題意識があり(Patriotta and Siegel, 2019)、そのために一般法則を探究するドミナント・アプローチに対して、アントレプレナーシップは特定のコンテキストから発生すること、生きた経験や実践を捉えること(Hjorth, Jones, and Gartner, 2008)といった方法的特徴がある。そして、この方法がアントレプレナーシップ研究の規範を強化、拡大、深化させるものとなること(Gartner, 2013)を志向する。

アントレプレナーシップ研究におけるメタ理論的内省について、以下の2点を指摘したい。第1に、アントレプレナーシップ研究のメタ理論は実

証主義に傾斜した認識論にあり、方法論的多様性は不足していることである。そこには現在の実証科学の国際標準化の潮流と国際ジャーナルの制度化の影響が反映されている。特に、主要な国際ジャーナルに掲載されることが「良い論文」を評価する指標となるなど、制度や評価が研究の価値を生み出す状況となっていることが想像できる。第2に、実証科学へのアンチテーゼとしての方法も確実に制度化されつつあることである。ヨーロッパ学派の視点は、例えば理論のレベルでみた二つのフレームワークに関する研究が前提とする成長やパフォーマンスなどとは異なる評価軸を提供する。

一方で、レビューの結果やWelterらの主張をみる限り、アントレプレナーシップ研究全体でその多様性を包括的に理解する方法論はいまだ確立されていないことが読みとれる。より具体的には、ヨーロッパ学派が問題提起する「認識論のレベル」と、個々の研究が方法として採用するコンテクスチャライゼーションが目指す「方法のレベル」をつなぎ、より体系性を有する「方法論のレベル」まで昇華する必要がある。特に、ヨーロッパ学派の視点と方法をアンチテーゼや個別研究でのメソッドとして終わらせないための実践的考察が求められる。多様性を捉える方法論を確立するためには、実証科学が優勢となる世界では見落とされがちな視点からブレイクスルーを行う必要がある。以下では、アントレプレナーシップの価値と概念のロジックについてみていきたい。

#### 4 アントレプレナーシップの 価値と概念のロジック

##### (1) アントレプレナーシップと価値

なぜ特定の認識論や方法論だけでは不十分なのか。特に、前節(3)でみたメタ理論的内省のフ

レームワークに関する二つの研究は、アントレプレナーシップのダイナミクスを統合的に捉える方法として、その先行要因から帰結までを実証する一定の有効性をもつものであると考えられる。ここでは、アントレプレナーシップと価値をめぐる考察を行いたい。

近年、欧米を中心に注目を集める価値評価研究では、経済においては経済的価値のみならず、複数の評価基準と多様な価値があり (Boltanski and Thévenot, 1991; Stark, 2009)、現在においては経済的価値へ偏重し、その効率性や成果の測定が追求されているとする (Lamont, 2012)。アントレプレナーシップの基本を振り返れば、すべてのアントレプレナーがイノベーションを行うわけではなく (Autio, *et al.*, 2014)、アントレプレナーは多様なゴールをもつものである (Wiklund, Wright, and Zahra, 2019)。経済学の視点から国の競争優位とアントレプレナーシップの関係、公式経済における利益のためのアントレプレナーシップとして議論されることもあるが、それも多様な価値の一つでしかない。例えば、社会学の視点から人生と個人の生活との関係をみるエマージェント・ライフ・オリエンテーション (Spedale and Watson, 2014) や、新しい経済、社会、制度、文化環境へ向けた解放を意味する *entrepreneuring* (Rindova, Barry, and Ketchen, 2009) など新たな概念を生み出している。

アントレプレナーは単に雇用やイノベーション、生産性と成長など経済的価値のみならず (van Praag and Versloot, 2007)、社会的役割を有し、社会や環境に利益をもたらす経済、社会、環境的価値のブレンド価値を創造するために、ベース・オブ・ピラミッド戦略、ソーシャル・アントレプレナーシップ、企業の社会的責任を組み合わせる存在 (Zahra and Wright, 2016) としても期待されている。アントレプレナーシップは複数の評価基準を用いて創造的な摩擦を生み出す

存在 (Stark, 2009) としても定義されるが、アントレプレナーは私たちが想定する目的や手段の枠を超えてその価値を無数に生み出し続けている。

このようにアントレプレナーシップは多様な価値の豊かさを有する存在である。しかし、その知識創造を行うメタ理論の状況において、特定の認識論や方法論のヘゲモニー (覇権) 的状況、方法論的多様性が不足している状況下では、最終的にその多様性は経済的価値やその表象としての成長やパフォーマンスといった実証的価値へのみ落とし込まれてしまう。つまり、多様であるはずの価値が単一性へ収斂<sup>しゅうれん</sup>してしまう。そして、その状況を現在の実証研究の国際標準化がさらに加速させる。その結果、学術環境の「パブリケーション・ゲーム」(Butler and Spoelstra, 2018) が進行する。また、その研究成果が実践から乖離<sup>かいり</sup>する危険性がある。規範科学の偏在などによる特定の言説へのバイアスと政策的ミスマッチ (藤本, 2017)、中小企業や起業家へのイメージ (関, 2017) などさまざまな影響を想定しうる。当然のことだが、これは実証研究やその制度化を何ら否定するものではない。それぞれの分野には何らかのヘゲモニー的状況がある (Cornelissen, 2019)。

価値の単一性への収斂は、対象の動向と学術環境の制度化、さらには資本主義や社会主義など国家の経済・社会的システムのはざままで形成され、その当事者性に基づく経済的価値など一定の価値体系によって構成される。また、時代のムードや感情によっても影響を受けることが考えられる。おそらく実証研究およびヨーロッパ学派がそれぞれの視点から研究を蓄積することによって方法的増加が進んでも、おそらくこの状況は解決しないのではないか。そして、ここに本稿のような方法論研究の意義があるが、アントレプレナーシップ研究がメタ理論の状況をさらに発展させ、独自の領域となるには (Alvarez and Barney, 2013)、それらを解決し、支えるデザイン

や実践 (Wright, 2017) としての方法論的基礎が必要となる。

## (2)アントレプレナーシップの概念のロジック

価値評価研究において、多様な価値を測定するのみならず、価値づけるプロセスや価値を生み出す実践も重視される (Vatin, 2013)。アントレプレナーシップがもつ多様な価値の豊かさは、上述した経済や人生、解放、社会に関する価値の範疇にとどまらないだろう。あらゆる学問分野の発展はその分野の概念の構築と批判を繰り返す必要があるが、アントレプレナーシップという存在を「概念」のレベルで意味づける価値の多様性を把握することこそが、その多様性を把握することにつながるのではないか。概念とは、ほかの関連する現象と区別するために、その現象の特徴、属性あるいは特質を特定する「認知的シンボル (あるいは抽象語)」 (Podsakoff, MacKenzie, and Podsakoff, 2016) などと定義される。アントレプレナーシップに多様な価値の豊かさを概念のレベルで価値づける実践を把握するには、その基礎となるアントレプレナーシップの概念のロジックを明らかにする必要がある。

本稿ではアントレプレナーシップの概念のロジックについて、仮説的に「概念接続の身軽さ」と「概念の内と外」の二つの視点から検討したい。

まず、「概念接続の身軽さ」について検討する。アントレプレナーシップは、戦略論と接続して戦略的アントレプレナーシップを、社会理論と接続して社会的アントレプレナーシップを、国際経営と接続して国際的アントレプレナーシップを生み出す。学際研究のなかでも、アントレプレナーシップ研究は相対的に (そして、おそらく絶対的にも)、他領域との接続の頻度や程度が高い分野とってよいだろう。この概念接続の特徴がアントレプレナーシップ研究のオリジナリティになりうる。

では、その概念接続によってどのような価値づけが行われるのか。次に、社会的アントレプレナーシップを例として、「概念の内と外」について検討する。社会的アントレプレナーシップは、概念の構成要素 (「内」) に①社会的価値創造、②ソーシャル・アントレプレナー、③ソーシャル・アントレプレナーシップ・オーガニゼーション、④市場志向、⑤ソーシャル・イノベーションの五つをもつ本質的に論争的な概念である (Choi and Majumdar, 2014)。では、社会的アントレプレナーシップは概念の接続 (「外」) にどのような特徴があるか。社会的アントレプレナーシップは営利を追求する存在としてのアントレプレナーシップ (私的なもの) に、社会 (公的なもの) が接続する構造にある。本来的に矛盾すると一般的に考えられる「私」と「公」の概念が接続することで、社会的アントレプレナーシップという新しい概念を生み出し、結果としてアントレプレナーシップがもつ価値全体を拡張させるものとなっている。

社会的アントレプレナーシップであれば本来アントレプレナーシップが意味するものと反すると考えられる価値づけが行われるが、例えば戦略的アントレプレナーシップであれば戦略というアントレプレナーシップが追求する私的な側面を戦略や組織の視点からさらに加速させる価値づけが行われ、国際的アントレプレナーシップであればその活躍の場としてのフィールドや価値創造と機会の射程を地理的に拡大する価値づけが行われる。つまり、アントレプレナーシップは多様な「外」の概念と身軽に接続することで自らの概念の射程を広げ、その本来の意味と相反する概念や加速させる概念、拡大する概念などと接続することで自らの価値を拡張させる概念のロジックをもつことがわかる。以下では、多様な価値の豊かさを概念のレベルで価値づける実践のてがかりとして、戦略的、社会的、国際的といったアントレプレ

ナーシップと接続する接頭辞の全体像を把握したい<sup>15</sup>。

## 5 アントレプレナーシップの 多様性のレビュー

### (1) 方法

これまでの問題意識を踏まえ、ここではアントレプレナーシップの概念と接続する接頭辞のシステムティック・レビューを行う。システムティック・レビューは、伝統的なナラティブ・レビューとは異なり、主に研究動向の推移や特定のトピックの実証研究とエビデンスの抽出など、複製可能で、科学的かつ透明性のあるプロセスを通してエビデンスを抽出する方法である（例えば、Tranfield, Denyer, and Smart, 2003）。

本稿では以下の対象と期間、抽出方法とする。まず、対象はアントレプレナーシップ研究に関連した主要な国際ジャーナルであるJournal of Small Business Management、Entrepreneurship Theory and Practice、International Small Business Journal、Journal of Business Venturing、Family Business Review、Entrepreneurship and Regional Development、Small Business Economics、Strategic Entrepreneurship Journalの8ジャーナルである。次に、期間はそれぞれのジャーナルの創刊から2019年9月までに刊行された号とする。なお、Journal of Small Business Managementのみ、公式ホームページで把握できる2001. 39 (1)以降の号を対象とした。そして、抽出方法は各ジャーナルのホームページを参照し、タイトルおよびキー

ワードに「～ entrepreneurship」と明示的に言及されたトピックに基づき、トピックと登場数をカウントした。タイトルとキーワードに同トピックが登場した場合は1カウント、複数トピックが登場した場合はそれぞれのカウントとした。なお、論説やコメント、アクセプティッド・ペーパー、未公開論文などは含めず、刊行された号に収録された論文のみを検討した。

ゆえに、以下の方法的課題が指摘できる。第1に、本や学位論文、プロシーディングス<sup>16</sup>、未刊行論文、日本などローカルの研究コミュニティの論文が含まれない点である。基本的にいわゆる国際的に流通する「権威のある」国際ジャーナルへ傾斜したバイアスがある。第2に、抽出方法をタイトルおよびキーワードに限定し、明示的に表現されたトピックしか抽出されない点である。接頭辞を特定せず、暗黙的に概念化する研究も相当程度存在することが予想される。また、例えば「地域」を指す接頭辞のregionalやlocal、ruralなどは、概念の境界や方法が明示的ではなく、また厳密に区別されていない可能性がある。今後は要旨や実証内容も抽出方法の視野に入れたナラティブ・レビューとセットで実施すべきである。第3に、本来的に学際性やその普及を前提とするならば、アントレプレナーシップ研究以外の応用科学分野のジャーナルも対象とすべき点である。例えば、アントレプレナーシップ研究の知識をマネジメントの実証研究に応用するAcademy of Management Journalや組織論の理論領域に応用するOrganization Studiesなど、その知識や理論が数多く採用、収録されるジャーナルも含めた検討が必要となる。以上の方法的限界のある「予備的」「準」システムティック・レビューであることを明記する。

<sup>15</sup> 概念のロジックとして、entrepreneurial ecosystem (Spigel, 2017) などの接尾辞、entrepreneurship as method (Saravathy and Venkataraman, 2011) などの形容詞・副詞ほか、entrepreneuring (Rindova, Barry, and Ketchen, 2009) などの動詞化に注目する方法が考えられる。しかし、いずれも仮説の域を出ず、また概念に関する研究を踏まえた十分な検討ができていない。今後の検討課題としたい。

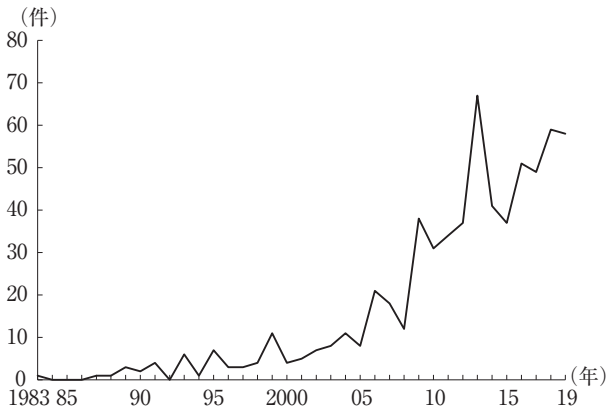
<sup>16</sup> 学術集会などの会議で募集される論文。

表-1 トピックの登場数

ジャーナル	創刊年	期 間	登場数
Journal of Small Business Management	1963年	2001. 39 (1) ~2019. 57 (4)	20
Entrepreneurship Theory and Practice	1976年	1976. 1 (1) ~2019. 43 (6)	36
International Small Business Journal	1982年	1982. 1 (1) ~2019. 37 (8)	29
Journal of Business Venturing	1985年	1985. 1 (1) ~2019. 34 (5)	53
Family Business Review	1988年	1988. 1 (1) ~2019. 32 (3)	4
Entrepreneurship and Regional Development	1989年	1989. 1 (1) ~2019. 31 (7-8)	56
Small Business Economics	1989年	1989. 1 (1) ~2019. 53 (3)	81
Strategic Entrepreneurship Journal	2007年	2007. 1 (1-2) ~2019. 13 (3)	18

資料：筆者作成 (以下同じ)

図-2 トピックの登場数の推移



(注) 対象や抽出方法については、本文参照。

## (2) 結果

レビューの結果、トピックの登場数は643、トピックの数は141であった。まず、それぞれのジャーナルにおけるトピックの掲載数をみていく。それぞれのジャーナルごとに1年の刊行数や各号に含まれる論文数も異なることに注意が必要であるが、Small Business Economicsが81と最多で、近接するファミリービジネス研究のジャーナルであるFamily Business Reviewは4と最少であった(表-1)。

次に、トピックの登場数の推移である。図-2から明らかなように、2000年以降、特に2010年代以降の増加が顕著に確認できる。これは「息をの

むペース」「黄金時代」(Wiklund, *et al.*, 2011) と評された2000年代以降のアントレプレナーシップ研究自体の発展と符合する。トピックの登場数の最多となったSmall Business Economicsは産業組織論など中小企業の経済学を柱とするジャーナルであるが、経済学の視点を応用して、多様化するアントレプレナーに接近する実証研究が相当程度増加したと考えられる。ただし、研究の引用数などは検討していないため、そのインパクトは把握できない。

最後に、主要なトピックの詳細をみていく。本来、トピックの価値は等価であり、トピックの登場数の順位づけが序列を意味するものではないが、トピックの登場数が3回以上の上位40トピックをまとめる(表-2)。そして、その上位の3トピックについてみていきたい。Corporate Entrepreneurshipはコーポレート・ベンチャーリング(Burgers, *et al.*, 2009)やミドルマネージャーの認識(Hornsby, Kuratko, and Zahra, 2002)など、アントレプレナーシップと組織とのかかわりのなかでも法人組織をめぐる価値が語られていることが指摘される。Social EntrepreneurshipはGoogle Scholarに基づく計量書誌学を行う研究によれば、1998年まで2桁で推移していたパブリケーションが2012年には3,870に急増するなど(Sassmannshausen and Volkman, 2018)、現在最もホットなトピックの一つといえる。例えば、

表-2 上位のトピック

トピック	登場数	備考	トピック	登場数	備考
corporate	81	(注)1	serial	8	
social	77	(注)2	environmental	8	
international	30	(注)3	business	8	(注)13
nascent	28		transnational	7	
strategic	25		firm, firm-level	6	
academic	22		knowledge-intensive	6	(注)14
immigrant, migrant	21	(注)4	commercial	5	
technology	17	(注)5	early-stage	5	(注)15
female	15		comparative	5	
women	14	(注)6	green	5	
sustainable	13	(注)7	productive	4	
portfolio	10		transgenerational	4	
institutional	10	(注)8	university	4	(注)16
necessity	10	(注)9	family	3	
ethnic	10	(注)10	technical	3	
minority	9	(注)11	local	3	
regional	9		organizational	3	
informal	9		innovative	3	(注)17
opportunity	9	(注)12	hybrid	3	
rural	8		development	3	

- (注) 1 international corporate, innovation-based corporateを含む。  
 2 international socialを含む。  
 3 comparative internationalを含む。  
 4 Chinese immigrant, migrants, in-migrantを含む。  
 5 technological, nanotechnology, corporate technological, high technology, high-techを含む。  
 6 women'sを含む。  
 7 sustainability-drivenを含む。  
 8 international institutionalを含む。  
 9 necessity based, necessity-motivated, necessity-based, necessity-drivenを含む。  
 10 minority ethnic, Chinese ethnicを含む。  
 11 ethnic minorityを含む。  
 12 opportunity-motivated, opportunity-based, improvement-driven opportunity, opportunity-drivenを含む。  
 13 new business, small business, family-business, community business, young businessを含む。  
 14 knowledge spillover, knowledge-basedを含む。  
 15 female early-stage, male early-stageを含む。  
 16 university-ledを含む。  
 17 innovation-drivenを含む。

Social Entrepreneurshipは個人の特性として、情熱、フラストレーション、同情、共感など四つを先行要因としながら、自己・他者志向の動機を追求する存在であることが明らかになっている (Ruskin, Seymour, and Webster, 2016)。International Entrepreneurshipはその定義をめぐる再検討 (Oviatt and McDougall, 2005)<sup>17</sup>や国際

化とパフォーマンスのメタアナリシス (Schwens, *et al.*, 2018)が行われるなど、Social Entrepreneurshipと同様にメタ考察を必要とするレベルに発展したトピックである。例えば、国際化を行う起業家の個人的価値として、達成、力、主体性、慈悲、セキュリティの五つが特定されている (Bolzani and Foo, 2018)。

<sup>17</sup> 国際的アントレプレナーシップは「将来の財やサービスを創造するための—国境を越えた—機会の発見、制定、評価、活用」と定義される (Oviatt and McDougall, 2005)。

上位のトピックをやや抽象化すると、アントレプレナーシップと法人組織性 (corporate)、社会性 (social)、国際性 (international)、初期性 (nascent)、戦略性 (strategic)、学術性 (academic)、文化的外部性 (immigrant, migrant)、技術性 (technology)、性差 (female, women) の価値づけをみることができる。

### (3) 考察

さらに、上位のトピックのみならず、ジャーナル1論文しか掲載されないトピックもある。例えば、都市と対比される田舎性 (rural)、人道性 (humane)、即興性 (improvisational)、野心性 (ambitious)、違法性 (illegal)、回避性 (evasive)、英雄と対比される日常性 (mundane) などである。本稿で言及できる価値づけは限定的であるが、以上のトピックからのみでもアントレプレナーシップの概念接続の裾野の広さをみることができる。

本稿では、世界のアントレプレナーシップにおける対象のレベルからメタ理論のレベルまでのメタ理論的内省の検討を行い、とりわけ、メタ理論のレベルは機能主義、実証科学に傾斜したプレ・パラダイグマティックの段階にあることを確認した。もとより、実証科学とその知識の流通については何ら批判されるものではないが、そのヘゲモニー的状况によって価値の単一性への収斂が生じること、その結果としての経済的価値や成長、パフォーマンスへの傾斜はアントレプレナーシップを捉える理論と実践においてさまざまな課題を生む可能性があること、現在の学術環境の制度化に合わせた厳密な学術解は導き出せるが、実践を含むアントレプレナーシップの理解を目指すうえでは限定的な解になってしまうことを指摘した。エレファント・テーゼによって指摘された個と全体のジレンマをいかにして解決することができるのか。

本稿では、アントレプレナーシップという存在

を概念のレベルで意味づける価値の多様性を把握することこそがその多様性を把握することにつながると仮定した。そのうえで、価値評価研究を参照しながら概念のロジックを明らかにし、その一つである接頭辞のレビューを行った。この方法論は特定の状況とその関係性から対象を捉えるコンテクスチャライゼーションの方法をヨーロッパ学派の認識論につなぎ、単にポストモダンや対象レベルの異質多元性に注目するだけではないアントレプレナーシップの多様性を包括的に捉える知識産出の基盤としての方法論的基礎を提供しうる。本稿では、その実践的なデザインまで踏み込めてはいないが、以上の考察を踏まえ、今後の検討課題を提示したい。

第1に、本稿で行った価値づけのレビューを細目としたアントレプレナーシップの多様性を捉える準拠枠をつくることである (= 地図をつくる)。「地図」は世界の地理や地形に関するあらゆる情報があらかじめ書き込まれ、読む者の視点や状況によって際限なく読みつくすことができる。本稿で明らかになった接頭辞は、現時点におけるアントレプレナーシップの多様性を捉える細目表を提示する。価値評価には価値そのものの本質と評価するという動詞が含まれる。地図を読む人間がどのような状況か、どこに向かえばよいのか。これからは、本稿で明らかとなったアントレプレナーシップの多様性の細目を参照しながら、その経済的価値のみに偏らない語り方を、研究や実践に關与する主体間で創造する必要がある。

第2に、多様性を捉える準拠枠はこれからも無限に変化する可能性を有していることである (= 地図をアップデートする)。多様性の1要素が生まれる可能性は常に現象の最先端にある。その意味で、本稿でみたようにアントレプレナーとのコミュニケーションの実践を視野に入れた知識創造や概念構築を行う必要がある。また、Stark (2009) は多様な評価基準の「不協和」から新たな価値が



見出されることを指摘しているが、価値評価に当たっては価値と評価基準の間のダイナミズムを捉えなければならない。つまり、対象の変化をいかに捉えるのか、対立する評価基準がいかなる不協和を生むか、その不協和からいかに合意形成を行うかなどを検討する必要がある。

## 6 おわりに

本稿は日本語で執筆されていることから明らかなように、日本のローカルな研究コミュニティの問題意識に基づいている。国際ジャーナルをはじめとする国際的な研究コミュニティにおいては、ロラン・バルトがいうような「知識の学際的集約に基づく一つの対象（主体）の創造」は必要ないのかもしれない。しかしながら、本稿において価値評価研究とアントレプレナーシップ研究の参照で明らかになった方法論的課題、とりわけ価値の単一性への収斂の課題は、国際的な研究コミュニティの内部からは生じにくい問題意識と視点に基づく。学術環境の制度化は、実証研究のみならずヨーロッパ学派が先導する質的研究を含む多元的な研究アプローチで構成されるべきことはおそらく世界共通であり、本稿をさらに高度化することは学術環境をもより豊かにする可能性を秘めている点は明記したい。

本稿はアントレプレナーシップの多様性を包括的に捉える知識産出の基盤としての方法論的基礎に関する考察を行った。世界と日本のアントレプレナーシップの現況からメタ理論の構図と課題の提示、価値の重要性と概念のロジックの解明、多様性の網羅的理解を進めるシステムティック・レビューからその多様性を捉える「地図」としての準拠の必要性を指摘した。以下では、本稿の学術的インプリケーションと実践的インプリケーション、課題をまとめたい。

まず、学術的インプリケーションである。本稿

が検討した価値評価研究による価値づけの研究は、現在進行する実証研究がヘゲモニーの研究コミュニティの内部からは生じにくい問題意識である。アントレプレナーシップの価値と価値づけは、実証研究が行う法則性の定立と質的研究が行う特殊性の記述の中間点に位置づけられるものである。エレファント・テーゼからも明らかだが、知識の累積的な断片化 (Harrison and Leitch, 1996) は多くの場合、そういった中間点に関する考察がないために生じるものである。その意味で、本研究はメタ理論的内省のそれぞれのレベルをつなぐ扇の要となりうることが示唆される。この論考がさらに発展すれば、エレファント・テーゼのブレイクスルーを越え、個と全体のデザインをさらに前に進めるものとなりうる。

また、本稿が検討した多様性のレビューをより抽象的に整理することでより価値づけの精度が高まると同時に、学際的交流を促進し、アントレプレナーシップの接頭辞の概念系 (エコシステム) を構想しうる。Zahra and Newey (2009) は学際研究のインパクトについて、理論、フィールド、実践家のレベルほかをつなぐ方法を検討しているが、この構想はさらにそれらを概念のレベルでつなぐ方法を検討しうる。この構想が実現すれば、接頭辞間でさまざまな「不協和」(Stark, 2009) や創発的衝突による新たな価値創出が行われ、学際研究としてのさらなるインパクトにつながる可能性がある。

次に、実践的インプリケーションである。学術研究の断片化は、連動する政策や実践の近視眼にもつながりかねない。規範科学の偏在による特定の言説へのバイアスと政策的 mismatches (藤本, 2017) は多くの場合、実証的研究が提示するエビデンスと現状との相対化の不足に起因する。本稿でレビューされたアントレプレナーシップの概念レベルでの多様性は一定の網羅性と実証研究のエビデンスを有しており、さらに精緻化することに

よって、流行に左右されない政策的オプションを検討する際の一つのツールになりうる。例えば、日本においてソーシャルビジネスを評価する際、政策的には社会性・事業性・革新性の3点から定義されるが、社会的アントレプレナーシップの実証研究や個人の特性と社会的意義と相対化して、その制度的期待やプレッシャー的状况と現在のあり方を問い直す一つの参照点となりうる。

また近年、アントレプレナー像を単に革新的英雄として捉えるのではなく、多様な価値の豊かさのなかでイメージし、考察する研究はますます充実している(鵜飼編著、2018; 磯辺、2019)。中小企業や起業家は国の成長や生産性のためだけに存在するものではない。本稿が行った価値づけを伴う方法論的基礎が実現すれば、社会のなかでさまざまな視点から中小企業や起業家をより豊かに語る方法を生み、そのイメージ(関、2017)の向上や「起業無縁社会」(安田、2016)の解消にも何らかの効果をもたらすことが示唆される。さらに、

本稿が実証研究との相対化のなかで位置づけられれば、中小企業や起業家に対する政策における過剰な期待と実態における過小な評価をつなぐものになりうる。

そして、課題である。Gartner (2001) がエレファント・テーズで強調したように、アントレプレナーシップの学際性の「森」のなかで、その多様性を捉える「調和のとれた全体」は、そのデザインが実現してはじめて成立する。デザインとは「社会が自身の限界点としての外部性を捉え、それを社会の内部に節合する動き」と定義されるが(山内・平本・杉万、2017)、本稿ではアントレプレナーシップ研究におけるメタ理論的内省による価値の単一性への収斂の課題の提示、実証科学とヨーロッパ学派の位置づけとその限界点としての価値づけの方法の意義を検討したにすぎない。本稿で行った多様性のレビューをさらに精緻化・抽象化し、何らかのかたちで一つの統合を行う必要がある。

#### <参考文献>

- 浅川和宏 (2019) 「経営研究の国際標準化時代における質の高い論文の条件：日本からのアプローチ」『組織科学』第52巻第4号、pp.4-12
- 磯辺剛彦 (2019) 『世のため人のため、ひいては自分のための経営論 ミッションコア企業のイノベーション』白桃書房
- 入山章栄 (2015) 『ビジネススクールでは学べない世界最先端の経営学』日経BP社
- 鵜飼信一編著 (2018) 『日本社会に生きる中小企業』中央経済社
- 江島由裕 (2017) 「アントレプレナーシップの社会的意義—アントレプレナーの果たす役割とは何か?」山田幸三・江島由裕編著『1からのアントレプレナーシップ』碩学舎、pp.17-31
- 河村耕平 (2018) 「現代の経済学と中小企業」鵜飼信一編著『日本社会に生きる中小企業』中央経済社、pp.174-186
- 忽那憲治 (2013) 「アントレプレナーシップを学ぶ重要性和楽しみ」忽那憲治・長谷川博和・高橋徳行・五十嵐伸吾・山田仁一郎編著『アントレプレナーシップ入門—ベンチャーの創造を学ぶ』有斐閣、pp.1-16
- 坂下昭宣 (2014) 「因果分析の方法—ケーススタディとサーベイリサーチの方法論的比較—」『商学論究』第61巻第4号、pp.25-44
- 清水洋 (2016) 「統計を用いた研究が最強か?—そんなわけではないが、最強として構築されつつある—」『経営哲学』第13巻第2号、pp.2-10
- 関智宏 (2017) 「中小企業をイメージする：2013年度における大学生を対象とした調査から」『同志社商学』第69巻第1号、pp.85-148
- 竹中克久 (2013) 『組織の理論社会学—コミュニケーション・社会・人間—』文眞堂
- 平野哲也 (2015) 「中小企業・アントレプレナーシップ研究における質的研究—解釈主義アプローチを中心に—」『星

- 陵台論集』第48巻第1号、pp.31-54
- 平野哲也 (2018) 「中小企業研究の方法的立場—中小企業概念の系譜とデザインの方法—」日本中小企業学会編『新時代の中小企業経営—GlobalizationとLocalizationのもとで— (日本中小企業学会論集37)』同友館、pp.208-221
- (2019) 「これからの中小企業理解の方法論確立へ向けて—中小企業について語るときに必要なこと—」『商工金融』第69巻第2号、pp.70-71
- 藤本隆宏 (2017) 「現場指向企業としての中小企業」『経済系』第270集、pp.1-12
- 安田武彦 (2016) 「起業無縁社会日本における小規模企業の役割」日本中小企業学会編『地域社会に果たす中小企業の役割—課題と展望— (日本中小企業学会論集35)』同友館、pp.97-108
- 山内裕・平本毅・杉万俊夫 (2017) 『組織・コミュニティデザイン』共立出版
- 山田幸三 (2017) 「アントレプレナーシップの基礎理論—アントレプレナーとはどのような人々なのか?」山田幸三・江島由裕編著『1からのアントレプレナーシップ』碩学舎、pp.3-16
- 山田仁一郎・植田祐紀・柳淳也 (2015) 「日本におけるentrepreneurship研究領域の書誌情報分析：学術翻訳語の普及過程とその多様性の継続」『経営研究』第66巻第2号、pp.77-95
- Aldrich, Howard E. and Ted Baker (1997) “Blinded by the Cites? Has There Been Progress in Entrepreneurship Research?” in Sexton, Donald L. and Raymond W. Smilor (Eds.), *Entrepreneurship 2000*, Chicago, IL: Upstart Publishing, pp.377-400.
- Aldrich, Howard E. and Martin Ruef (2018) “Unicorns, Gazelles, and Other Distractions on the Way to Understanding Real Entrepreneurship in the United States.” *Academy of Management Perspectives*, 32 (4), pp.458-472.
- Alvarez, Sharon A. and Jay B. Barney (2013) “Epistemology, Opportunities, and Entrepreneurship: Comments on Venkataraman et al. (2012) and Shane (2012).” *Academy of Management Review*, 38 (1), pp.154-157.
- Audretsch, David B. (2012) “Entrepreneurship Research.” *Management Decision*, 50 (5), pp.755-764.
- Audretsch, David B., Donald F. Kuratko and Albert N. Link (2015) “Making Sense of the Elusive Paradigm of Entrepreneurship.” *Small Business Economics*, 45 (4), pp.703-712.
- Autio, Erkko, Martin Kenney, Philippe Mustar, Don Siegel, and Mike Wright (2014) “Entrepreneurial Innovation: The Importance of Context.” *Research Policy*, 43 (7), pp.1097-1108.
- Baker, Ted and Reed E. Nelson (2005) “Creating Something from Nothing: Resource Construction through Entrepreneurial Bricolage.” *Administrative Science Quarterly*, 50 (3), pp.329-366.
- Bates, Timothy, William D. Bradford, and Robert Seamans (2018) “Minority Entrepreneurship in Twenty-First Century America.” *Small Business Economics*, 50 (3), pp.415-427.
- Baumol, William J. (1968) “Entrepreneurship in Economic Theory.” *American Economic Review*, 58 (2), pp.64-71.
- Bluhm, Dustin J., Wendy Harman, Thomas W. Lee, and Terence R. Mitchell (2011) “Qualitative Research in Management: A Decade of Progress.” *Journal of Management Studies*, 48 (8), pp.1866-1891.
- Boltanski, Luc and Laurent Thévenot (1991) *De la Justification. Les économies de la grandeur*, Paris: Gallimard. (リュック・ボルトンスキー、ローラン・テヴノー著、三浦直希訳 (2007) 『正当化の理論 偉大さのエコノミー』新曜社)
- Bolzani, Daniela and Maw Der Foo (2018) “The “Why” of International Entrepreneurship: Uncovering Entrepreneurs’ Personal Values.” *Small Business Economics*, 51 (3), pp.639-666.
- Boxenbaum, Eva and Linda Rouleau (2011) “New Knowledge Products as Bricolage: Metaphors and Scripts in Organizational Theory.” *Academy of Management Review*, 36 (2), pp.272-296.
- Braun, Timo, Aristides I. Ferreira, Thomas Schmidt, and Jörg Sydow (2018) “Another Post-Heroic View on Entrepreneurship: The Role of Employees in Networking the Start-Up Process.” *British Journal of Management*, 29 (4), pp.652-669.
- Burgers, J. Henri, Justin J.P. Jansen, Frans A.J. Van den Bosch, and Henk W. Volberda (2009) “Structural

- Differentiation and Corporate Venturing: The Moderating Role of Formal and Informal Integration Mechanisms." *Journal of Business Venturing*, 24 (3), pp.206-220.
- Burrell, Gibson and Gareth Morgan (1979) *Sociological Paradigms and Organisational Analysis: Elements of the Sociology of Corporate Life*, London, UK: Heinemann. (バーレル、モーガン著、鎌田伸一・金井一頼・野中郁次郎訳 (1986) 『組織理論のパラダイム—機能主義の分析枠組』千倉書房)
- Busenitz, Lowell W., Lawrence A. Plummer, Anthony C. Klotz, Ali Shahzad, and Kevin Rhoads (2014) "Entrepreneurship Research (1985-2009) and the Emergence of Opportunities." *Entrepreneurship Theory and Practice*, 38 (5), pp.981-1000.
- Busenitz, Lowell W., G. Page West III, Dean Shepherd, Teresa Nelson, Gaylen N. Chandler, and Andrew Zacharakis (2003) "Entrepreneurship Research in Emergence: Past Trends and Future Directions." *Journal of Management*, 29 (3), pp.285-308.
- Butler, Nick and Sverre Spoelstra (2018) "Academics at Play: Why the 'Publication Game' Is More Than a Metaphor." *Academy of Management Proceedings*, 1.
- Cardon, Melissa S., Joakim Wincent, Jagdip Singh, and Mateja Drnovsek (2009) "The Nature and Experience of Entrepreneurial Passion." *Academy of Management Review*, 34 (3), pp.511-532.
- Carlsson, Bo, Pontus Braunerhjelm, Maureen McKelvey, Christer Olofsson, Lars Persson, and Håkan Ylinenpää (2013) "The Evolving Domain of Entrepreneurship Research." *Small Business Economics*, 41 (4), pp.913-930.
- Chetty, Sylvie K., Jukka Partanen, Erik S. Rasmussen, and Per Servais (2014) "Contextualising Case Studies in Entrepreneurship: A Tandem Approach to Conducting a Longitudinal Cross-Country Case Study." *International Small Business Journal*, 32 (7), pp.818-829.
- Choi, Nia and Satyajit Majumdar (2014) "Social Entrepreneurship as an Essentially Contested Concept: Opening a New Avenue for Systematic Future Research." *Journal of Business Venturing*, 29 (3), pp.363-376.
- Clifford, James and George E. Marcus (Eds.) (1986) *Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography*, Berkeley, Los Angeles, London: University of California Press. (ジェイムズ・クリフォード、ジョージ・マーカス編、春日直樹・足羽與志子・橋本和也・多和田裕司・西川麦子・和辻悦子訳 (1996) 『文化を書く』紀伊國屋書店)
- Cornelissen, Joep (2019) "Imagining Futures for Organization Studies: The Role of Theory and of Having Productive Conversations Towards Theory Change." *Organization Studies*, 40 (1), pp.55-58.
- Covin, Jeffrey G. and Dennis P. Slevin (1989) "Strategic Management of Small Firms in Hostile and Benign Environments." *Strategic Management Journal*, 10 (1), pp.75-87.
- Cunliffe, Ann L. (2011) "Crafting Qualitative Research: Morgan and Smircich 30 Years On." *Organizational Research Methods*, 14 (4), pp.647-673.
- Davidsson, Per, Murray B. Low, and Mike Wright (2001) "Editor's Introduction: Low and MacMillan Ten Years On: Achievements and Future Directions for Entrepreneurship Research." *Entrepreneurship Theory and Practice*, 25 (4), pp.5-15.
- Davis, Murray S. (1971) "That's Interesting! Towards a Phenomenology of Sociology and a Sociology of Phenomenology." *Philosophy of the Social Sciences*, 1 (4), pp.309-344.
- Dean, Michelle A., Christopher L. Shook, and G. Tyge Payne (2007) "The Past, Present, and Future of Entrepreneurship Research: Data Analytic Trends and Training." *Entrepreneurship Theory and Practice*, 31 (4), pp.601-618.
- Denzin, Norman, K. and Yvonna S. Lincoln (Eds.) (2000) *The Handbook of Qualitative Research (2nd ed.)*, Thousand Oaks, CA: Sage. (N・K・デンジン、Y・S・リンカン編、平山満義・岡野一郎・古賀正義訳 (2006) 『質的研究ハンドブック1巻 質的研究のパラダイムと眺望』北大路書房)
- Dyer, Jeffrey H., Hal B Gregersen, and Clayton Christensen (2008) "Entrepreneur Behaviors, Opportunity

- Recognition, and the Origins of Innovative Ventures.” *Strategic Entrepreneurship Journal*, 2 (4), pp.317-338.
- Easterby-Smith, Mark, Richard Thorpe, and Andy Lowe (2002) *Management Research: An Introduction (2nd ed.)*, London, UK: Sage. (M・イースターバイ=スマス、R・ソープ、A・ロウ著、木村達也・宇田川元一・佐渡島紗織・松尾陸訳 (2009) 『マネジメント・リサーチの方法』白桃書房)
- Gartner, William B. (1990) “What Are We Talking about When We Talk about Entrepreneurship?” *Journal of Business Venturing*, 5 (1), pp.15-28.
- (2001) “Is There an Elephant in Entrepreneurship? Blind Assumptions in Theory Development.” *Entrepreneurship Theory and Practice*, 25 (4), pp.27-39.
- (2013) “Creating a Community of Difference in Entrepreneurship Scholarship.” *Entrepreneurship and Regional Development*, 25 (1-2), pp.5-15.
- Gibbert, Michael, Winfried Ruigrok, and Barbara Wicki (2008) “What Passes as a Rigorous Case Study?” *Strategic Management Journal*, 29 (13), pp.1465-1474.
- Gorgievski, Marjan J. and Ute Stephan (2016) “Advancing the Psychology of Entrepreneurship: A Review of the Psychological Literature and an Introduction.” *Applied Psychology*, 65 (3), pp.437-468.
- Grant, Paul and Lew Perren (2002) “Small Business and Entrepreneurial Research: Meta-Theories, Paradigms and Prejudices.” *International Small Business Journal*, 20 (2), pp.185-211.
- Gutermann, Daniela, Nale Lehmann-Willenbrock, Diana Boer, Marise Born, and Sven C. Voelpel (2017) “How Leaders Affect Followers’ Work Engagement and Performance: Integrating Leader-Member Exchange and Crossover Theory.” *British Journal of Management*, 28 (2), pp.299-314.
- Harrison, Richard T. and Claire M. Leitch (1996) “Discipline Emergence in Entrepreneurship: Accumulative Fragmentalism or Paradigmatic Science?” *Entrepreneurship, Innovation, and Change*, 5 (2), pp.65-83.
- Hassard, John and Julie Wolfram Cox (2013) “Can Sociological Paradigms Still Inform Organizational Analysis? A Paradigm Model for Post-Paradigm Times.” *Organization Studies*, 34 (11), pp.1701-1728.
- Hatch, Mary Jo and Ann L. Cunliffe (2013) *Organization Theory: Modern, Symbolic and Postmodern Perspectives (3rd ed.)*, Oxford, UK: Oxford University Press.
- Hébert, Robert F. and Albert N. Link (1989) “In Search of the Meaning of Entrepreneurship.” *Small Business Economics*, 1, pp.39-49.
- Henry, Colette, Lene Foss, and Helene Ahl (2016) “Gender and Entrepreneurship Theory Research: A Review of Methodological Approaches.” *International Small Business Journal*, 34 (3), pp.217-241.
- Herron, Lanny, Harry J. Sapienza, and Deborah Smith-Cook (1991) “Entrepreneurship Theory from an Interdisciplinary Perspective: Volume I.” *Entrepreneurship Theory and Practice*, 16 (2), pp.7-12.
- Hindle, Kevin (2004) “Choosing Qualitative Methods for Entrepreneurial Cognition Research: A Canonical Development Approach.” *Entrepreneurship Theory and Practice*, 28 (6), pp.575-607.
- Hjorth, Daniel, Campbell Jones, and William B. Gartner (2008) “Introduction for ‘Recreating/Recontextualising Entrepreneurship’.” *Scandinavian Journal of Management*, 24 (2), pp.81-84.
- Hlady-Rispal, Martine and Estèle Jouison-Laffitte (2014) “Qualitative Research Methods and Epistemological Frameworks: A Review of Publication Trends in Entrepreneurship.” *Journal of Small Business Management*, 52 (4), pp.594-614.
- Hornsby, Jeffrey S., Donald F. Kuratko and Shaker A. Zahra (2002) “Middle Managers’ Perception of the Internal Environment for Corporate Entrepreneurship: Assessing a Measurement Scale.” *Journal of Business Venturing*, 17 (3), pp.253-273.
- Hornsby, Jeffrey S., Jake Messersmith, Matthew Rutherford, and Sharon Simmons (2018) “Entrepreneurship Everywhere: across Campus, across Communities, and across Borders.” *Journal of Small Business Management*, 56 (1), pp.4-10.

- Ireland, R. Duane (2007) "Strategy vs. Entrepreneurship." *Strategic Entrepreneurship Journal*, 1 (1-2), pp.7-10.
- Ireland, R. Duane, Christopher R. Reutzell, and Justin W. Webb (2005) "Entrepreneurship Research in AMJ: What Has Been Published, and What Might the Future Hold?" *Academy of Management Journal*, 48 (4), pp.556-564.
- Jennings, Peter L., Lew Perren, and Sara Carter (2005) "Guest Editors' Introduction: Alternative Perspectives on Entrepreneurship Research." *Entrepreneurship Theory and Practice*, 29 (2), pp.145-152.
- Johns, Gary (2006) "The Essential Impact of Context on Organizational Behavior." *Academy of Management Review*, 31 (2), pp.386-408.
- Karatas-Ozkan, Mine, Alistair R. Anderson, Alain Fayolle, Jeremy Howells, and Roland Condr (2014) "Understanding Entrepreneurship: Challenging Dominant Perspectives and Theorizing Entrepreneurship through New Postpositivist Epistemologies." *Journal of Small Business Management*, 52 (4), pp.589-593.
- Kuratko, Donald F., Michael H. Morris, and Minet Schindehutte (2015) "Understanding the Dynamics of Entrepreneurship through Framework Approaches." *Small Business Economics*, 45 (1), pp.1-13.
- Lamont, Michèle (2012) "Toward a Comparative Sociology of Valuation and Evaluation." *Annual Review of Sociology*, 38 (21), pp.201-221.
- Landström, Hans, Gouya Harirchi, and Fredrik Åström (2012) "Entrepreneurship: Exploring the Knowledge Base." *Research Policy*, 41 (7), pp.1154-1181.
- Leitch, Claire M., Frances M. Hill, and Richard T. Harrison (2010) "The Philosophy and Practice of Interpretivist Research in Entrepreneurship: Quality, Validation, and Trust." *Organizational Research Methods*, 13 (1), pp.67-84.
- Lounsbury, Michael and Mary Ann Glynn (2001) "Cultural Entrepreneurship: Stories, Legitimacy, and the Acquisition of Resources." *Strategic Management Journal*, 22 (6-7), pp.545-564.
- Miller, Danny and Isabelle Le Breton-Miller (2017) "Underdog Entrepreneurs: A Model of Challenge-Based Entrepreneurship." *Entrepreneurship Theory and Practice*, 41 (1), pp.7-17.
- Morgan, Gareth and Linda Smircich (1980) "The Case for Qualitative Research." *Academy of Management Review*, 5 (4), pp.491-500.
- Mowday, Richard T. and Robert I. Sutton (1993) "Organizational Behavior: Linking Individuals and Groups to Organizational Contexts." *Annual Review of Psychology*, 44 (1), pp.195-229.
- Oviatt, Benjamin M. and Patricia P. McDougall (2005) "Defining International Entrepreneurship and Modeling the Speed of Internationalization." *Entrepreneurship Theory and Practice*, 29 (5), pp.537-554.
- Patriotta, Gerardo and Don Siegel (2019) "The Context of Entrepreneurship." *Journal of Management Studies*, 56 (6), pp.1194-1196.
- Ployhart, Robert E. and Jean M. Bartunek (2019) "Editors' Comments: There Is Nothing so Theoretical as Good Practice-A Call for Phenomenal Theory." *Academy of Management Review*, 44 (3), pp.493-497.
- Podsakoff, Philip M., Scott B. MacKenzie, and Nathan P. Podsakoff (2016) "Recommendations for Creating Better Concept Definitions in the Organizational, Behavioral, and Social Sciences." *Organizational Research Methods*, 19 (2), pp.159-203.
- Porter, Theodore M. (1995) *Trust in Numbers: The Pursuit of Objectivity in Science and Public Life*, Princeton, NJ: Princeton University Press. (セオドア・M・ポーター著、藤垣裕子訳 (2013) 『数値と客観性 科学と社会における信頼の獲得』みすず書房)
- Renko, Maija, Sarah Parker Harris, and Kate Caldwell (2016) "Entrepreneurial Entry by People with Disabilities." *International Small Business Journal*, 34 (5), pp.555-578.
- Repko, Allen F. (2012) *Interdisciplinary Research: Process and Theory*, London, UK: Sage.
- Rindova, Violina, Daved Barry, and David J. Ketchen, Jr. (2009) "Entrepreneurship as Emancipation." *Academy of*

- Management Review*, 34 (3), pp.477-491.
- Ripsas, Sven (1998) "Towards an Interdisciplinary Theory of Entrepreneurship." *Small Business Economics*, 10 (2), pp.103-115.
- Rocha, Hector and Julian Birkinshaw (2007) "Entrepreneurship Safari: A Phenomenon-Driven Search for Meaning." *Foundations and Trends® in Entrepreneurship*, 3 (3), pp.205-255.
- Rogoff, Edward G. and Ramona Kay Zachary Heck (2003) "Evolving Research in Entrepreneurship and Family Business: Recognizing Family as the Oxygen That Feeds the Fire of Entrepreneurship." *Journal of Business Venturing*, 18 (5), pp.559-566.
- Ruskin, Jennifer, Richard G. Seymour, and Cynthia M. Webster (2016) "Why Create Value for Others? An Exploration of Social Entrepreneurial Motives." *Journal of Small Business Management*, 54 (4), pp.1015-1037.
- Saebi, Tina, Nicolai J. Foss, and Stefan Linder (2019) "Social Entrepreneurship Research: Past Achievements and Future Promises." *Journal of Management*, 45 (1), pp.70-95.
- Sandberg, Jörgen (2005) "How Do We Justify Knowledge Produced within Interpretive Approaches?" *Organizational Research Methods*, 8 (1), pp.41-68.
- Sarasvathy, Saras D. (2008) *Effectuation: Elements of Entrepreneurial Expertise*, Cheltenham, UK: Edward Elgar.
- Sarasvathy, Saras D. and Sankaran Venkataraman (2011) "Entrepreneurship as Method: Open Questions for an Entrepreneurial Future." *Entrepreneurship Theory and Practice*, 35 (1), pp.113-135.
- Sassmannshausen, Sean Patrick and Christine Volkmann (2018) "The Scientometrics of Social Entrepreneurship and Its Establishment as an Academic Field." *Journal of Small Business Management*, 56 (2), pp.251-273.
- Schwens, Christian, Florian B. Zapkau, Michael Bierwerth, Rodrigo Isidor, Gary Knight, and Rüdiger Kabst (2018) "International Entrepreneurship: A Meta-Analysis on the Internationalization and Performance Relationship." *Entrepreneurship Theory and Practice*, 42 (5), pp.734-768.
- Shane, Scott and Sankaran Venkataraman (2000) "The Promise of Entrepreneurship as a Field of Research." *Academy of Management Review*, 25 (1), pp.217-226.
- Shepherd, Dean A. (2011) "Multilevel Entrepreneurship Research: Opportunities for Studying Entrepreneurial Decision Making." *Journal of Management*, 37 (2), pp.412-420.
- Shepherd, Dean A. and Roy Suddaby (2017) "Theory Building: A Review and Integration." *Journal of Management*, 43 (1), pp.59-86.
- Short, Jeremy C., David J. Ketchen, Jr, James G. Combs, and R. Duane Ireland (2010) "Research Methods in Entrepreneurship: Opportunities and Challenges." *Organizational Research Methods*, 13 (1), pp.6-15.
- Spedale, Simona and Tony J. Watson (2014) "The Emergence of Entrepreneurial Action: At the Crossroads between Institutional Logics and Individual Life-Orientations." *International Small Business Journal*, 32 (7), pp.759-776.
- Spigel, Ben (2017) "The Relational Organization of Entrepreneurial Ecosystems." *Entrepreneurship Theory and Practice*, 41 (1), pp.49-72.
- Stark, David (2009) *The Sense of Dissonance: Accounts of Worth in Economic Life*, Princeton, NJ: Princeton University Press. (デヴィッド・スターク著、中野勉・中野真澄訳 (2011) 『多様性とイノベーション 価値体系のマネジメントと組織のネットワーク・ダイナミズム』 マグロウヒル・エデュケーション、日本経済新聞出版社)
- Tang, Jintong, K. Michele (Micki) Kacmar, and Lowell Busenitz (2012) "Entrepreneurial Alertness in the Pursuit of New Opportunities." *Journal of Business Venturing*, 27 (1), pp.77-94.
- Tranfield, David, David Denyer, and Palminder Smart (2003) "Towards a Methodology for Developing Evidence-Informed Management Knowledge by Means of Systematic Review." *British Journal of Management*, 14

- (3), pp.207-222.
- Tsoukas, Haridimos and Christian Knudsen (Eds.) (2003) *The Oxford Handbook of Organization Theory: Meta-Theoretical Perspectives*, Oxford and New York: Oxford University Press.
- Ucbasaran, Deniz, Paul Westhead, and Mike Wright (2001) "The Focus of Entrepreneurial Research: Contextual and Process Issues." *Entrepreneurship Theory and Practice*, 25 (4), pp.57-80.
- van Burg, Elco and A. Georges L. Romme (2014) "Creating the Future Together: Toward a Framework for Research Synthesis in Entrepreneurship." *Entrepreneurship Theory and Practice*, 38 (2), pp.369-397.
- van Praag, C. Mirjam and Peter H. Versloot (2007) "What is the Value of Entrepreneurship? A Review of Recent Research." *Small Business Economics*, 29 (4), pp.351-382.
- Vatin, François (2013) "Valuation as Evaluating and Valorizing." *Valuation Studies*, 1 (1), pp.31-50.
- Venkataraman, Sankaran (1997) "The Distinctive Domain of Entrepreneurship Research: An Editor's Perspective." in Katz, Jerome A. and Robert H. Brockhaus (Eds.), *Advances in Entrepreneurship, Firm Emergence and Growth*, Volume 3, Greenwich, CT: JAI Press, pp.119-138.
- von Krogh, Georg, Cristina Rossi-Lamastra, and Stefan Haefliger (2012) "Phenomenon-Based Research in Management and Organisation Science: When Is It Rigorous and Does It Matter?" *Long Range Planning*, 45 (4), pp.277-298.
- Watkins-Mathys, Lorraine and Sid Lowe (2005) "Small Business and Entrepreneurship Research: The Way through Paradigm Incommensurability." *International Small Business Journal*, 23 (6), pp.657-677.
- Watson, Tony J. (2012) "Entrepreneurship-A Suitable Case for Sociological Treatment." *Sociology Compass*, 6(4), pp.306-315.
- Welter, Friederike (2011) "Contextualizing Entrepreneurship-Conceptual Challenges and Ways Forward." *Entrepreneurship Theory and Practice*, 35 (1), pp.165-184.
- Welter, Friederike, Ted Baker, David B. Audretsch, and William B. Gartner (2017) "Everyday Entrepreneurship-A Call for Entrepreneurship Research to Embrace Entrepreneurial Diversity." *Entrepreneurship Theory and Practice*, 41 (3), pp.311-321.
- Welter, Friederike, Ted Baker and Katharine Wirsching (2019) "Three Waves and Counting: The Rising Tide of Contextualization in Entrepreneurship Research." *Small Business Economics*, 52 (2), pp.319-330.
- Wiklund, Johan, Per Davidsson, David B. Audretsch, and Charlie Karlsson (2011) "The Future of Entrepreneurship Research." *Entrepreneurship Theory and Practice*, 35 (1), pp.1-9.
- Wiklund, Johan, Mike Wright, and Shaker A. Zahra (2019) "Conquering Relevance: Entrepreneurship Research's Grand Challenge." *Entrepreneurship Theory and Practice*, 43 (3), pp.419-436.
- Williams, Colin C. and Sara J. Nadin (2013) "Beyond the Entrepreneur as a Heroic Figurehead of Capitalism: Re-Representing the Lived Practices of Entrepreneurs." *Entrepreneurship and Regional Development*, 25 (7-8), pp.552-568.
- Wright, Patrick M. (2017) "Making Great Theories." *Journal of Management Studies*, 54 (3), pp.384-390.
- Zahra, Shaker A. and Lance R. Newey (2009) "Maximizing the Impact of Organization Science: Theory-Building at the Intersection of Disciplines and/or Fields." *Journal of Management Studies*, 46 (6), pp.1059-1075.
- Zahra, Shaker A. and Mike Wright (2011) "Entrepreneurship's Next Act." *Academy of Management Perspectives*, 25 (4), pp.67-83.
- (2016) "Understanding the Social Role of Entrepreneurship." *Journal of Management Studies*, 53 (4), pp.610-629.
- Zahra, Shaker A., Mike Wright, and Sondas G. Abdelgawad (2014) "Contextualization and the Advancement of Entrepreneurship Research." *International Small Business Journal*, 32 (5), pp.479-500.